

無碍光

あみだとはとはに照^てります心にて

我^{われ}てふものゝかげはあらしな

さへられぬ光のなかに住^すみながら

しらぬは己^{おの}がまよひなりけり

あみだ佛^{ぶつ}とともにすむ身^みはとことばに

無^む爲^ゐのみやこのなかにぞありける



善願先伸

如來善願乃先以止

非聖正我思願乃

聖信與公識乃力也

眾生或解終

自望之也

今更いまさらにゆく衛へをさがすすべもなし

あみだ佛ほとけの中なかにすむ身みは

ぬば玉たまの心こころのやみはふかくとも

みだの光ひかりに消きえもこそすれ

さへられぬ光ひかりにとはに照てらさるゝ

我身わがみなりとはしらぬがほなり

さへられぬ光ひかりの中なかに住すみぬれば

世まのさまぐもみものなりけり

大^{おほ}ミオヤの聖^{きよ}きみむねに契^{かなへ}るは

人^{ひと}の心^{こころ}のまことなりけり

きよらけき神^{かみ}のみむねにかなへるは

人^{ひと}の心^{こころ}のまことなりけり

世^よの中に眞理^{しんり}をたれも尊^{たふと}むは

神^{きよ}聖^きみむねのあればなりけり

神^{しん}聖^{せい}とは明^あけく照^てらす大神^{おほがみ}の

行^{おこなひ}爲^なてらす智^ち慧^ゑにぞありける

神^{しん}聖^{せい}は誠^{まこと}の道^{みち}の光^{ひかり}にて

人^{ひと}の知^ち見^{けん}を照^てらすとぞしれ

天地の内と外とにてりとほるは

まことの光ばかりなりけり

永遠にかはらざりけり大ミオヤの

みむね示せる真理の光

永遠の真理の光ましませば

悪てふ闇はきえましものを

神聖は普ねき道の光にて

たれ人とても律さぬはなし

神聖は普ねくわたる真理なれば

いづれの人も律さぬはなし

神聖は一切衆生の

心をてらす日の光なり

神聖は神の智慧にて上もなき

倫理照らします光なりけり

神聖は誠の道を照らします

ミオヤの智慧の光なりけり

天地の内と外とに照りとほる

人の誠の心なりけり

神聖の聖旨の光明らけく

心の善惡をてらしわくなり

神聖の智慧の鏡は明らけく

人の知見を照らしますなり

只己が知見のいかゞ神聖の

鏡に向ひ照り返へし見よ

神聖は侵すまじとは大ミオヤの

真理の道の光なりせば

大明に私照のなきは大ミオヤの

神聖にます道の光ぞ

神聖の聖意にかなふ行爲に

千萬人も恐ることなし

いかばかり悪魔の闇はつよくとも

真理の光に消えざるはなし

大ミオヤの命にそむくほかにまた

罪とて別にあらざるものを

神聖はかみの真理のみむねより

衆生に知見の光なりけり

神聖のみむねの照らす御前には

自づと侵すことも得ぬなれ

神聖のみむねが人の最高の

良心として己を制せり

神聖の聖旨が人の靈性の

光とならば正知見なり

神聖は神の明らかなる智慧が

人の倫理を照らすなりけり

神聖の聖旨にかなふこゝろこそ

人の至誠と云ふべかりけり

神聖は神の聖旨が靈性の

道德自律の光なりけり

神聖とは聖旨に出でゝ世の人を

御許にまねく光なりけり

神聖の聖旨にかなふ行爲を

これ正義とは名づくなりけり

神聖は神の眼にして正義とは

神の道ゆく足にぞありける

神聖は神の聖旨の行爲を

照らす真理の光なりけり

神聖の真理の光明らけく

善悪邪正を照らしわくなり

神聖の聖意に應ふ意こそ

神の道ゆく行爲とはなれ

神聖しんせいの分わかれの靈性れいせいなかりせば

世よに罪惡ざいあくの責せめはなからむ

神聖しんせいの智慧ちゑの鏡かきみは明あきらけく

常つねに照てらしてくもらざりけり

邪じゃをすて、正義たしきにつく意こころこそ

即すなはち神かみの聖意むねなりけり

邪よこしまと惡あしきをすて、正たしきと

善よきとをえらび取るとが本願ほんぐわん

數かずならぬおのがはからひうちすて、

唯ただ聖旨みことしるにまかせてよかし

私のすべての邪悪は我にあり

すべての正善は聖意なりけり

大ミオヤは宇宙全體を我とせば

自己のはからひましまさぬなり

大みむねに指導かれつゝ行へば

至善の國に到るなりけり

邪と悪はいかほどつよく勉めても

つひに亡びぬことなかりけり

邪と悪はくらきやみなれば

正善の光に消えざるはなし

正善の神の聖旨にかなはざる

業は必らず亡ぶなりけり

大聖意の分れの靈私に

つひやすばかり罪なるはなし

神聖の靈性受けし人の生を

私に爲す罪ぞおそろし

神聖の分れの靈性具しながら

すておくばかり罪なるはなし

神聖の分れの靈性具しながら

亡びにおつる人の多かる

大聖意の分れの職責果さずば

闇が中に亡びゆくなり

人生は聖旨の責任盡すべき

義務あるものと知るや知らずや

大ミオヤの命に生きし我身ぞと

知らざる人を迷とは云ふ

たゞおのがはからひにして生れしに

あらざるものと自覺せよかし

大ミオヤのみはからひより人の身を

受けたるものと自覺せよかし

罪といふは聖旨に背く心より

作す業にこそ名けしものよ

大ミオヤの聖旨に背く外にまた

罪と咎とはあらざるものぞ

聖旨の命にそむく業ばかり

即ち悪と云ふべかりけり

大ミオヤの靈しき性を受けながら

現はさるるを罪咎といふ

人の性本來悪にあるならば

罪の責任あらまじものを

神聖はミオヤに受けし靈性の

光を出す本にてぞある

おのれのみほしきがまゝに他の人の

苦をかへりみぬものは悪なり

大ミオヤはすべてを同じ子にあれば

公平無私に照しますなり

神聖のミオヤに受けし靈性を

けがさぬこゝろ神にぞありける

大ミオヤの恩寵に靈が開けずば

己が罪惡しらぬなりけり

神聖と正義は父の聖旨にて

恩寵は母の心なりけり

神聖と正義は父の聖旨にて

子らの智行をすゝましむなり

神聖と正義は父の威にて

子らを聖きにならしむるなれ

恩寵の母の愛育なかりせば

神聖正義はさとらまじもの

たらちめの恩寵の乳に育まれて

神聖正義の目足

（

たらちねにうけたる靈性たらちめの

恩寵しなくば開けまじきに

子を愛す恩寵の靈氣なかりせば

靈の花はいかで開けん

世をすくふ佛智の不思議てふことは

これ神聖の聖旨なりけり

神聖は普遍の眞理にましましては

一切の人に律しうるなり

自覺とは眞理の光あきらけく

おのれを照すことにこそあれ

神聖の光は内と外もなく

常にかはらで照りかゞやけり

大ミオヤの眞理の光にて

自我をさとるを自覺とは云ふ

天命は是神聖に何人も

侵し得ざる靈物にして

堅に三世横に十方貫きて

碍へぬは眞理の光なりけり

大ミオヤの眞理の光を自覺として

覺行するを佛とは云ふ

一切の萬法を統べて照りとほし

のこさぬものは眞理なりけり

神聖の威神の光あけくして

いかなるものも伏せぬはなし

神聖の光を自己の心とし

恐るゝなきぞ佛なりけり

私をすてゝ公正に歸るとは

ミオヤの聖旨に隨ふにこそ

神聖の聖旨を己が意とし

屋漏に恥ぢぬ心ともがな

正義

正義とは公平無私の大ミオヤの

聖旨に契ふ行爲なりけり

邪を捨て正義につく意こそ

即ち神の正義なりけり

正義には神の聖旨の加はれば

孰をも懼るゝ色なかりけり

邪惡を捨て、正善撰びとり

國を建てます彌陀の本願

正義とは己がはからひ捨ておきて

聖き意にまかすなりけり

邪と悪はすべて己に有ものぞ

聖旨は正と善とのみなり

大聖旨に指導れつゝ行爲ば

至善の國に向上みゆくなり

大ミオヤと共に行くへはあやまたず

かならず聖きみくになりけり

身と口と意の業が聖旨より

行ふことを正義とはいふ

邪よと惡あくは闇くらき惑まどひの闇やみなれば

正義せいぎの光ひかりに消きえざるはなし

正義せいぎなる聖み旨むねに背そむく行おこ爲なひは

必かなららずつひに亡ほろびゆくなり

大おほミオヤの公こう平へい無む私しの聖み旨むねをば

むねとするこそ正義せいぎなりけれ

恩 寵

かぎりなきちからにみてる大空おほぞらを

たゞ大おほそらとそらに見みるらん

けすぢほどもめぐみたさぬくまなきも

毛すぢばかりもしらぬひとかな

かぎりなき備そなへによりて活いきながら

露つゆばかりだにしらぬ悲かなしさ

かくばかり大おほき備そなへによらざれば

活かなはぬ生命いのちとするやしらすや

天地あつちのよろづの備そなへ誰たがために

爲なせしものぞと何なぞ思おもはざる

たらちめをよぶとはしらしみどり子この

なくこゑにこそ乳房ちぶさふくめつ

喜見光佛



他正喜眼乃光明也

按化也其目之明也

佛之
華之
覺任
以



大教經集也

證入也



無 對 光

大^{おほ}ミオヤの終^{つひ}局^ひの願^み望^{むね}に攝^{をさ}められ

無^{また}上^{なきさとり}覺^の位^{くらゐ}にはす(な)れ

本^{ほん}覺^{がく}の光^{ひかり}にそむきぬば玉^{たま}の

闇^{やみ}に迷^{まよ}へる子^こをまねきます

大^{おほ}ミオヤの常^{とこ}世^よにまよひうつりゆく

生^{しやうじ}死^の波^{なみ}にたゞよひにけり

大^{おほ}ミオヤの涅槃^{はつねーはな}にまよひては

生^{しやうじ}死^の海^{うみ}に浮^うきつしづみつ

永世なる光をしらで（　　）

生死のやみにまよひけるかな

絶對の自由をはなれ相對の

世の約束にほださるゝかな

大ミオヤの聖旨にかなひしあしたには

常世の日かげ常にかゝやく

ミオヤより受けし靈性は大ミオヤの

恩寵にてぞ開くなりけり

恩寵に靈育れつゝ終りには

ミオヤと同じ菩薩とはなれ

十萬億土

十萬の億と説きしもまことには

かぎりもしれぬ心なりけり

所觀なる佛を遠くおくほどに

能觀の心もいや大きくぞ

阿彌陀佛わが胸に在りてふひとの

ほとけとはいかに卑しきものぞ

みほとけをますく高くおもふほど

我が心もいやたふとけれ

いと神聖せいきほとけをおもふ心こころこそ

我おのれながらもほとけなりけり

彼國かのくにをますく遠とほくおもほへよ

我心おのがこころも大おほきくはなれ

神聖しんせいなるほとけをおもふからこそ

我心おのがこころさへ佛ほとけとはなる

かすもなきおのれをすてゝひたすらに

佛ほとけをおもふこゝろほとけぞ

みほとけをおもふほどこそほとけなれ

ひかりの中なかに闇やみははれける

みほとけの光し來れば我てふ

やみの心もはれざらめやは

真心にこゝもかしこもなかりけり

十方世界只ひとつにて

一向に佛をおもふこゝろこそ

佛の來らんちかみちぞかし

(げに)我は十萬億のかし處まで

廣しとしるは佛あればこそ

十萬億土は親の心のうち

いまはこの子の心とはなる

十萬億土のはるけき此處彼處

親子のこゝろ一つばかりぞ

十方世界に照せる親の心

念ふ子らの心とはなる

大ミオヤの光をよそに極樂を

求むる人の實にはかなし

六十萬那由陀の佛と十萬の

億土に置ける我本尊なり

本尊のみたけ六十萬億と

いふとも實はほとりなきなり

心殿しんでんの奥おくゆき十萬億まんおくといひ

實じつははてもほとりもなきにぞ

かぎりなきこの心殿しんでんにいかなれば

かぎり定ただまる本尊ほんぜんやあらん

本尊ほんぜんをいよ／＼高く心殿しんでんを

ます／＼大おほきくするほどぞよし

念佛者ねんぶつの大心殿だいしんでんは六十萬まん

十萬億まんおく土どのおくゆきにして

十萬億まんおく土どは親子おやこのものなれば

ゆきゝにはかるひともなきなり

眞心まごころに内うちと外はととてなかりけり

十萬億まんおくもへだてやはする

さへられぬ月つきの光ひかりのすむほどは

いづこもきよきみ國くにならずや

とこよなる無爲むゐのみやこは外ほかならじ

ミオヤのいます處ところなりけり

大おほミオヤの無爲むゐのみやこは永とこしへに

さちとさかえに照てりわたる處ところ

十方じゅうほうを盡つくしてさへぬみ光ひかりりの

なかには此處こゝと彼處かゝとはなし

かの國くにをはるけきほど、おもひにき

ミオヤのまことしらぬむかしは

ほかなしやこのつちくれに寄よす蟲むしの

うごめくまでの我わが身みばかりは

つちくれに寄よせる蟲むしともしらざりき

己おのがまことを知しらぬむかしは

常とこ世よなる無む爲かのみやこはおごそかに

真しん善ぜん微み妙めうのきはみなりけり

永とこしへに照てりわたるてふ大おほミオヤの

みむねにまかす心こころやすけれ

死してのちいかにや我は有や無やの

けふりもつひに盡きぬ元素とは

みほとけを念ふる外に術もなし

己が心の佛とならん

數ならぬ我等も佛の種しあれば

三世のほとけの數にはもれじ

我てふは有りや無しやにさまよはじ

本有の彌陀に歸命してから

麗はしき入日かゞやくさまばかり

聖きみくにたぐひてもがな

西に入る日のかゞやけるさまなくば

なにかきよき國をたぐへん

むらさきに匂ふ入日のさまなくば

何にたとへむ聖きみくにを

あくがれて西のみそらをあふぐなり

月のみすがたみまほしさに

日は入りて此處はやみよとなりぬれど

西のあなたはとほに照るなれ

ふるさとを西にしのあなたときゝしより

いる日ひのかたはこひしかりけり

こひしけれ西にしにかたぶく夕日ゆふひかげ

さすがに彌陀みだをしたふ身みなれば



密王光佛

衆生善始乃世所重

慧業重修

三三三三三

六六六乃光中

是乃其

乃其

炎 王 光

煩惱ぼんノウの賊ぞくもミオヤに歸きしぬれば

裏うらかへしてぞ菩提ぼだいとはなれ

昨日きのふまで兇賊せうぞくにてあれど改あらためて

降くだれば今日けふは忠臣ちゆうしんとなる

我胸わがむねは惡魔あくまやすみけん怪あやしける

千變せんべん萬化ばんくわとりとめもなし

英雄は色を好むと氣どりても

克己乏しき意氣地なしかな

克己なき英雄やあらん好む色を

制する力なほつよきにぞ

露ほどのよきことあらば誇りがほ

悪しきは人に知らせまじとて

み佛の光の消えしぬば玉の

胸は悪魔の巢窟にして

ミオヤより賜はりにけるまたもなき

時のたからもうばはれにけり

人にこそつゝみながらも願みて

うら恥かしき我心かな

我胸は千變萬化きはみなき

魔の巢窟と今は知られき

欲に目の無き煩惱にほだされて

みすみすやみに墮る人かな

己ほど己があだなるものなしと

知りがほにして知らぬ我かな

己のみ悪しと口に言ひながら

改めぬにはまだ知らぬなり

ともすればいかりのほのほもえたつは

忍ぶの水の乏しきにこそ

忿怒とは世に愚漢の腹のうちに

はく悪毒の瓦斯としれかし

言の葉のなかにいよいよかぐはしき

心の花を見る人もがな

底ひなき海のみむねに合ふ身にも

有爲の浪風起しやすらん

再びはかへらぬ日とは思へども

空しく過すくやしかりける

悔くいつゝもなほ徒いたづらに過すすには

己おのれながらも呆あきれけるかな

いたつきに耐たえがたき日ひも有ありがたし

よの常つねの日ひのことを知しられて

ミオヤより賜たまはりにける貴たき日ひを

たとみて過すすは貴たき人ひとなれ

言ことの葉はのはたらき多おほき人ひとは（　　）

心こころのうちは（　　）

深ふかき淵ちに魚うまはすむなり浅あき水みづに

みちな求もとめそ（　　）

いや深くおもふ心こころにいや深ふかき

さとのり(

憂うれきことのつもるにつけて進すすみなば

やがては安やすく耐たふるものなれ

大おほミオヤの恵めぐみは永とこ遠ほの花はななれば

心こころの花はなも散ちる時ときはなし

人ひとの世よは纜ともつな解なきてゆく舟ふねの

さし行ゆく港みなと定さだめざらめや

いづれとも港みなとさだめぬ船ふね人ひとの

（一）いかにむくかたに棹さざす

極樂のきよき港にすゝむには

光のみ名を燈明臺にして

光明の名號の燈臺を目的とし

すゝみ行く身は心安すけれ

光明のみ名にて照す燈臺は

きよきみ國の明にぞ有ける

人生の闇夜を照らす燈臺は

ミオヤのよぼふ御名にぞ有りける

永遠の光りにすゝむ人の世は

最幸福の旅路なりけり

たましひを常世の光にむすぶほど

人の光榮はあらまじものを

人の世はゆくへをしかとしらざりき

ミオヤゐますときかぬむかしは

人の世の(海には)船には乗れどいつれにか

よるべしらざる人のほかなき

○

ありがたやみだの御慈悲につままれて

この日ぐらしの身こそ安けれ

人はみなもと同胞といふものゝ

ミオヤをしらぬ人ぞ多かる

天地はよしわづかにもあらばあれ

我はミオヤと無量壽にして

なつかしき我同胞にわかちたし

とはに輝く此のみひかりを

たらちねの御手をはなれてみどり子の

成長なるべきみちやなからん

はてもなく六のちまたにさまよひき

ミオヤをたのむ心なきにぞ

大ミオヤの終局の目的にかなはずば

人の身うけし甲斐やあるべき

大ミオヤはいかなるみむねのましまして

われをいかすとさとりみよかし

人生てふまたなき此身うけながら

あだに暮すは愚ならずや

かぎりなき大恩寵に報ひむと

おもふつとめのいさましきかな

心てふこの不可思議の物を見よ

まことのミオヤなからましかば

大^{おほ}ミオヤをミオヤとおもひまごころに

御名^{みな}よぶひとのなつかしきかな

後^{のち}の世^よと此^{この}世^よとへだてあればとて

たゞ大^{おほ}ミオヤのみひかりのなか

大^{おほ}ミオヤのみむねのまゝにまかせなば

つひには海^{うみ}に流^{なが}れ入^いるなれ

四^よつの大^{おほ}かりの姿^{すがた}はさもあらばあれ

こゝろはとほに南無阿彌陀佛^{なむあみだぶつ}

後^{のち}の世^よにつなぐおもひの珠^{たま}ごとに

南無阿彌陀佛^{なむあみだぶつ}とくりかへしいふ

み佛ほとけの光ひかりし來きたればおのれてふ

やみの心こころもはれざらめやは

さへられぬひかりのなかとしりながら

つゝしみかねる身みこそあさまし

かしこめよまたつゝしめよみほとけの

てらすほかげのかたなわすれそ

石いしにさへ打うたば火ひは出いづ此この身みとて

覺さとりのひかりはなたざらめや

我おのれとて毘盧びるの御末みすゑと自みづからを

いやたふとみて道みちに進すすまむ

ピルシヤナの御末みすまと知らばいかにして

己われをあざむくものとなるべき

思おもひきや數かずにもならぬ我等われらまで

摩訶まびるしやなの御末みすまなりとは

あみだ佛ぶつに永遠とこほに照てらさる心こころには

我われてふのゝかげもあらじな

あみだ佛ぶつと共に住すむ身みはとことほに

無爲むゐのみやこの中なかにぞありける

いまさらにゆく衛へを求もとむべきもなし

あみだ佛ほとけのなかにすむ身みは

心だに無爲のみやこに住すれば

世のさまざまも見ものなりけり

こゝもまた無爲のみやことしられけり

あみだほとけのなかにすむ身は

天地もみなみほとけの中なれば

ミオヤの外にすみかやはある

法浄光伴

如来法

浄光

明

如ら

如来の
法を
弘め



如来の

法を

弘め

如来の

法を

清淨光

瀧つせの清きいづみにそゝげかし

日々に新たにこゝろのあかを

雲はれてさやかに照らす月かげを

きよき光にたぐひてやみむ

清らけき光に靈性みがゝれて

八面玲瓏に照りぞかどやく

靈性の天空はるゝ朝には

とはにかどやく日の光あり

無明なるねぶりもさめて靈性の

瞳とぞなりて心さやけき

さやけさを何にたとへん雲はれて

静かに照らす秋の夜の月

人の世のあだなるさまにけがしつゝ

清き光のまへにはづかし

浅ましくおもひながらも目に耳に

けがさるゝ（）はづかしきかな

浅ましや眼や耳にけがされて

靈の光はいつもかくれつ

靈性の開けしあらば目に耳に

此土さながら淨土なるらん

此處もまた淨き御國と識らざるは

また靈性のあけざればなり

つゝめども自づと面にあらはるれ

彌陀の心にふれしこゝろは

五根誤用

かえがたき六の賜あやまりて

くらきにまよふ物につかふな

眼も耳もおのれを落すものならじ

まよひぞ我をあやまたすなれ

道に入る六の官をいかなれば

正を落す門と爲すらむ

さゝぐるは道に入る身と爲す眼なき

まよひぞ我を闇に誘ふ

にえあがる湯ともなりまた蒸氣にも

同じき水をさまざまに見む

ミオヤより受けたる心のあらたまを

清き光にみがゝるゝなれ

草も木もからくれなるに見ゆるなれ

赤き眼がねをかけし人には

野も山もるりの光にかゞやくは

きよきに入らむしるしなるらめ

清かりし光に化せる心には

こゝもさながら淨土とは見む

かの國の池に心を澄してぞ

八の功德も具はるゝなり

清けき光おもへばさやかなる

月も一しほさやかなるなり

清けき光に心すみぬれば

とはに匂へる月のさやけき

にぎりより出でゝもあやに清らけき

蓮ぞ光にあふ心かな

照る月に己が心を入れぬれば

月や我かも我や月かも

にぎりにも染まぬ蓮の花ばかり

きよき光にあふ心なれ

清らけき光にあへる心にぞ

たぐひて照らす秋のよの月

み佛ほとけに我われを離はなれておもほへば

こゝもさながら清きよきみ國くにぞ

み光ひかりの中なかに住すむ身みは清きよらけき

國くにをいかでかよそに見みるべき

天 眼

あらがねも射い通とほして見みるはたらきは

これ天眼てんげんと云いふものにして

神通じんずうの眼めちからあれば幾いく重へへだつ

中なかを見みるともさへぬものなり

靈界れいかいのきよき五いつしうの色いろも香かも

見みゆるは法のりの眼まなこなりけり

法のりの眼めの開ひらけしからは靈界れいかいの

妙色めうしき莊嚴じやうごん顯めはれぞする

靈界れいかいの妙たなる聲こゑの聞きゆるは

そを法眼ほふげんと云いふべかりけり

かぐはしき香かはとことほにほへども

法のりの鼻はなにほふものにて

舌したのうち妙たなる味あじを感かんずるは

法のりの舌したのきよければなり

あたゝかにまたすゞやかに觸覺しよくかくの

覺おほゆるは法の身のりみとなればこそ

慧眼

十方じゅうぱうに圓まどかに照てりてさはるべき

もの一もなきは慧眼えいげんなりけり

十方じゅうぱうに圓まどかに照てりてみかゞみの

智慧ちゑの眼まなこの明あきらけきかな

耳みみもなく聲こゑもなくて（

圓まどかに聞きゆる慧眼えいげんなりけり

きく耳もきかるゝ聲もなかりけり

さやかに智慧のこゝろのみにて

香ひなき香をさへかぐは眞理にて

鼻なくてかぐ人の智慧にてありけり

無味の味をよくかみわけてあぢはふは

智慧の舌のあればなりけり

かたちなき眞法界を身となせば

觸るも觸らるもへだてやはする

みほとけの常寂光の莊嚴は

佛眼をもて見ゆるなりけり

一切の萬物の中に説く法は

佛の耳ぞ聞くべかりけり

歡^{よろこ}びの光^{ひかり}をしればとことばに

のどけき春^{はる}の心地^{こころ}こそすれ

かぎりなき恵^{めぐみ}みの中^{なか}に住^すみぬれば

ねてもさめてもうれしかりけり

天地^{あめつち}にみつよろこびのみ光^{ひかり}りの

照^てりわたりてや春^{はる}ののどけき

おもほへばおもふにいよ^{たの}樂^のしけれ

このみひかりにあへる心^{こころ}は

多やまじ
安んじまじ

乃光のり

如來のり

新茶光佛



淨悦活香

淨妙の原

香雲

生るるん

よろこびの光ひかりにあへる心こころには

ときはの春はるはのどけかりけり

すま提だいのまたなき幸さちをねがひなば

み名なにたよりにてみむねたよれよ

よろこびの光ひかりのなかに住すみぬれば

寝ねてもさめてもうれしかりけり

樂たのしさを何なににたとへんみほとけの

みむねの中に融と合ごしこゝろは

よろこびの光ひかりのなかとおぼへじ

まだ大おほミオヤをしらぬむかしは

いさましくくらさんものよよろこびの

ひかりあびつゝすごしぬる身は

ミオヤしらば四面楚歌の中ながら

心のおくに極樂ぞあり

み名をよび大ミオヤをばたよれかし

こゝも樂しきみ國なりけり

一心にこゝろの鏡みがき見よ

こゝもミオヤの御前なりせば

己が胸のすべてをなげてとけあはゞ

こゝも樂しきみもとなりけり

あみだ佛とこゝろをじひのみふところに

融合て

不思議なりけり

のどかなる春の日よりに咲きにほふ

花にたぐへん我心かな

大ミオヤのじひの光に融合へる

心はとはの春にて有りける

おのれてふおのれと今はおぼゝえじ

じひのみむねに融合ひし身は

うれしともまた楽しとも云ひがたし

じひの光に融合ひし身は

大ミオヤの光ひかりにさきし心こころこそ

ときはの春はるの花はなにぞ有あける

吹ふきすさむ憂うれき世よの風かぜはあらばあれ

慈悲じひのふところとはに安やすけれ

よろこびの光ひかりりのなかに住すみぬれば

とはにのどけき心こころ地ぢこそすれ

大ミオヤのじひの光ひかりをかふむれば

こゝも樂たのしき御國みくになりけり

うきことのかげさへ今いまはおぼゝへじ

このみひかりのてらすまへには

うき世ともいまは憂世とおもほへじ

じひの光に融合ひし身は

吹きすすむ憂世の風は烈しくも

じひのみむねのなかは安けき

いまは早や此處を憂世とおぼえじ

じひの光に融けあひし身は

やがてゆく西のかしことおもひにき

こゝも樂しきみ國なりしを

智 慧 光

ひきしめてむすぶ戸とぼそのひまよりも

静しづかにてらす秋あきの夜よの月つき

野のに山やまに笑あはめる春はるの草花くさばなも

みな實相じつさうのすがたなりけり

いろも香かも無む非ひ中道ちゆうだうとしるときは

花はなやさとのひらくなるらん

天地あめつちの萬よろづの法はふは假けと空くう

實じつにはすべて中道ちゆうだうなりけり

智慧光佛

如來智

慧乃

光明

光明
光明



光明

佛如見

光明

聖

真

光明

○

人の世は夢かうつゝかうつゝとも

夢とも見るもすべて空にて

金剛經

今といふ今さへ今の今ならず

いづれか今と今はさだめむ

心

世の恐る鬼さへ抹殺するものは

鬼よりも尙恐ろしき人

こゝろにはむかしもいまもなかりけり

おもふまに／＼顯はれぞすれ

こゝろにはむかしも今もなかりけり

いまはむかしにむかしはいまに

古今三世無碍

言葉にはむかしと聞くを大通智勝佛

今我心にまします

家々如之らと 二重化せら

光四子

新乃

有恒ふ

不新克伸



三修

現存

聖書

新生

作伸度生れ

不 斷 光

日^ひにあらた日^ひ々^々に新^{あら}たに改^{あらた}めむ

斷^たへぬ光^{ひかり}に照^{てら}さるゝ身^みは

わだつみもくみつくすとのいさましき

心^{こころ}に得^えたるまにの玉^{たま}かな

手^ても足^{あし}も斷^たれてもなほ安^{やす}らかに

忍^{しの}びしみあとならはんものよ

火^ひにやかれ錠^{つら}にうたれてくろがねも

世^よにめづらしきつるぎとはなる

ふしくもまた骨々も解かれても

安く忍びてひじりとはなる

みちのくの忍ぶの山路けはしくも

なるればやすくのぼり越すらん

するつひにかちどきあぐるものふは

忍ぶの鎧きればなりけり

眞心に此處もかしこもなかりけり

十方世界たゞ一つにて

六の度よろづの徳もことごとく

みむねにまかすつとめなりけり

月も日も西にゆくへをのりとして

ならばゞやがて涅槃にぞ入る

明ぬれば今日もおほせのつとめをば

果さんものといさみすゝまむ

天地のよろづはなべて大ミオヤの

大みはからひになるにぞありける

賜の時のたからをいたづらに

費すひとの浅ましきかな

賜の時のたからをたからとし

つとめてこそはたからとぞなれ

天地あつちのよろづの物ものを備そなへては

いのちを賜たまふミオヤとぞしれ

かぎりなき備そなへによりて活いかさるゝ

いのちとおもひあだにくらしそ

大おほミオヤのおほせのまゝに果はたすより

外ほかになすべき事こともなからむ

大おほミオヤの聖み旨せみにそむく心より

すべての罪つみはつくるなりけり

いときよき光ひかりにあふていときよく

雪ゆきを己おのれの心こころともがな

あたゝかなみめぐみにあふ胸の中

綽々として餘裕ありけり

こゝろしてすゝまんものよいときよき

光の（）にいざなはれつゝ

きよらけき聖意の衣着つる身は

御名をとなへて常にそゝげよ

罵詈の矢もそしりの銃丸も通らぬは

忍ぶの衣あつけければなり

忍

わだつみもくみ盡すとの勇ましき

心に得たるまにの玉かな

わだつみを汲み盡してぞまにの玉

得たる縁にならはんものよ

手も足も断れても尙安らかに

忍びしみあとならはんものよ

うたばうてたゝかばたゝけくろがねも

つるぎとぞなるしのびとほせば

打たれてもまた骨々を解かれても

安く忍びて

一

吹ききたる風のまに／＼さからはぬ

柳やなぎにならふこゝろ安やすけれ

みちのくの忍しのぶの山路やまぢさかしくも

なるればやすうのぼり越こゆらん

いづこにもいたるところにみほとけの

さとりの光ひかりかゝやきぞする

おのれいま人と生うまれてきしものゝ

いつれのかたにむけてさをさす

彼かの岸きしをいづれともまた覺おぼほえじ

この人は沈しづみつ沈しづみつ

何方へ行くべきみちもおぼほえじ

出で來しかたもしらぬ身なれば

おのが美を吹聴するは禮を失ふ

へりくだりてぞうつくしけれ

いさぎよくまた平かに正直に

温厚にして尙勇氣あれ

眞實の剛毅は世の凌辱にも

復讐を思はず平然として

大ミオヤの其身にかなふ儀とは

己をつくして全きとしれ

爲すべきに爲して行ふべきに行ふは

命のつとめ果さんが爲め

奮闘よ力行よミオヤの命より

人の身うけしかひとおもひて

大ミオヤの重負を致てたがひには

不平もらさぬ人は光榮

なか／＼に重荷を負ひて飽くまでも

果たし、人のほまれ高かけれ

咀嚼していよ／＼甘き味は

よく思ひてぞ眞理知るなれ

よしもなきおのがはからひぬぎすてゝ

本有ほんの天あまの月つきをながめよ

大おほミオヤのみめぐみの光ひかりかよひ來きて

心こころの花はなもさきそめにけり

あかねさす日ひのみひかりにうつろひて

金剛こんごう石せきは輝かがやけるかな

いざよひの月つきの光ひかりは西にしに入いる

日ひのひかりにぞ照てり かゞやく

有明ありあけの月つきとはいへどとはに照てる

日ひのみひかりのあればなりけり

大^{おほ}みむねを己^{われ}がこゝろとするときは

自^{みづか}ら律^{のつと}るのりとこそなれ

みほとけに此^{この}身^みのあぶらさゝぐなり

聖^み旨^{せみ}の智^ち火^{くわ}を點^{とま}して玉^{たま}へよ

大^{おほ}ミオヤの聖^み旨^{せみ}に我^{われ}のあるときは

大^{おほ}みさかえを身^みにぞあかさん

雲^{くも}上^へなる高^{たか}きのぞみにいざなはれ

いやしきこゝろおこらざりけり

雲^{くも}上^へなる高^{たか}きのぞみにいざなはれ

爲^なすことさへもいさぎよきかな

いや高^{たか}きのぞみしあればおのづから

ます／＼徳^{とく}にすゝまれはすれ

のりと云^いふのり多^{おほ}ければ此^{こゝ}のりを

さとるさとりもかぎりあらじな

いづこにもいたる處^{ところ}にみほとけの

さとりの光^{ひか}り照^てらさぬはなし

かぎりなきたからの藏^{くら}に入りてなほ

たからのかぎをいまはえにける

さいはひにたからのかぎをえし（　）

みのりのくらを開^{ひら}き見^みまほし

ミオヤより受けしまごゝろやすらかに

養ふてこそうるはしきかな

こゝろをば清廉にもちて生活を

いさぎよくせよ

ミオヤより負ひし職務をはたさずば

人の身うけし甲斐やなからん

いかなりし職務のありて人の身を

賜はりしぞと知るや知らずや

大ミオヤにうけし職務のあらなくば

人生はまこと無意義ならずや

精力をその天職につくしたる

人は最後のかちどきをあぐ

人生は神の命の戦ひに

悪魔の賊をたひらぐるため

爲すこともなく安逸をむさぼりて

すごすは國の害賊なりけり

身にも家にも國にもつくすは

みな大ミオヤにつくすなりけり

雖思光佛

玄深難思

乃光明地

至心祈願

名在思地



信不壞記乃

世尊

之身

心之安住

為如

難 思 光

大^{おほ}ミ^ミオヤのなさけのこもる喚^よび聲^{こゑ}に

深^{ふか}き眠^{ねむ}りも今^{いま}はさめける

いつかはたあくるものとは思^{おも}へども

待^{まち}ち遠^{とほ}かりししのゝめの空^{そら}

欲 生

かぎりなき光^{ひかり}のなかにとこしへに

生^ならへん身^みとならまほしけれ

我といふは絶對無限の大我なる

無量光壽の如來なりけり(我國欲生)

かぎりなき大我の中の我として

聖き生命とならまほしきに

肉の我に死して大我の中にまた

聖き我らは復活るなれ

絶對の大我の中に復活り

聖き生命と成りもこそせめ

そなふべき三つの心は南無阿彌陀

たすけ給へとねがふばかりぞ

信仰の種

佛性ぶつしょうの心こころの土地とちを墾たがさでは

聖きよき名みななる聖種せいしゆしげらじ

佛教ぶつけうに五性しやうかくべつ各別とと説とくものゝ

其源そのみなもとは一との佛性ぶつしょう

荒あれはてゝ種々しゆくの葉草はぐさの繁しげれるは

もとより土地とちの肥こへたればなり

肥こへし土地とちほど雑草ざつさふのしげるなり

こゝに墾ひらきて耕たがせ良よき實みを

もとよりも不毛の地には良き種を

播すとても生へはすまじに

雑草の繁茂れる土地ぞ頼もしき

土地に膏のあればなりけり

佛性は遠因同じものながら

遺傳素質に種々に分るる

閑蕪の素養によりて天性を

種々に陶冶するものにぞありける

種なくば生へまじものよまきおろす

園によりてぞ五性とはなれ

聖經の友

こゝかしこ身はへだつともちぎりてし

こゝろは經の園にあそばむ

よむ聲にこゝろもいつかさそはれて

たのしき園にめぐりあそばん

こののりの糸もてちぎりむすびつゝ

無量壽國にともにいたらん

子をおもふ親のこゝろをしれかしと

經のたよりにきくぞうれしき

この經をよむたびごとにおもふかな

ちぎりし友のふかきまことを

よそごとに聞きやしつらんかの國を

わが故郷としらぬむかしは

なげきつゝたれを待つとやおもふらん

親のこゝろを子はしらすして

ながき世のねむりもやがてさめぬべし

あかつきごとによむ經の音に

法の緒をこゝろのたまにつらぬきし

はちすのともはこひしかりけり

きよきあしたしづけき宵によむ聲に

こゝろも西にすみわたるかな

阿彌陀佛の緒をもてちぎりむすぶ身は

かぎりしられぬなかにぞありける

まちわびしミオヤのこゝろしれかしと

ふみのたよりに聞くぞうれしき

よみかはすこの法の聲とめて

後の世までのかたみとはせむ

まよひぬる子のためにぞと西へゆく

道のしるべに枝折しもかな

(親)も子もまたいもうともはらからも

經のいともてちぎりむすべよ

照しますほとけのかたもはづかしと

はぢぬわが身のいかにはづかし

にごり江にやどる月かげ見てもなほ

佛をたのむ身ぞたのもしき

見てもしれ聞きてもさとれたらちねの

子をおもひぬる深きころを

よそごとに聞きやしつらんこれぞこの

我がふるさと、しらぬむかしは

かざりつつたれをまつとやおもふらん

ミオヤのみむね子はしらすして

観無量壽經

序 品

鷲わしの山すまたか高たかねの月つきはかすかなる

宮居みやゐの奥おくに照てりとほるかな

日 想 觀

故郷を雲のあなたとおもほへば

入日のかたはこひしかりけり

水 想 観

澄む水に心すませば心とも

水ともつひにわかち得ぬかな

寶 地 觀

かの國に心うつせる朝には

庭のいさごも照りぞかどやく

實樹觀

わが庭にほの松まつ風の音かぜは妙たへにして

玉たまの植木うえきにひゞきかよひつ

實池觀

ひきしめて結むすぶ庵いほりは靜しづかにて

たからの池いけにすみわたるかな

實樓觀

行くすゑの御殿とばかりおもひにき

今の心のすまひなりしも

華座觀

みほとけのおましに咲ける蓮さへ

昔の種があればなりけり

佛身觀

ひさかたの天つみそらに照りながら

あふぐ心にすめる月かな

観音観

みほとけのめぐみにみてる心こそ

摩訶菩提薩埵のすがたなりけり

勢至観

みほとけのみむねを旨とする人は

これみほとけのあとのみほとけ

普観

迎へ來む蓮と云へど彌陀たのむ

人の心の花にぞありける

雜想觀

此所もまた無爲の都と知られけり

心の花の開くあしたは

まねかねど水さへすまばおのづから

月は夜なく通ひ來ぬらむ

七覽所々乃

神々々々

如星乃 意克

吾解光佛

范一开々々

神松乃 重志



妙々々

々々

々々

々々

々々